

五十 十字架上の最後のお言葉

イエズスはすっかり衰え果てた。主は乾ききった口でおおせられた。「わたしは、渇く。」このうめきを聞いてイエズスの友は二、三の兵卒らにぜひ水をひと口さし上げるようにと頼んだ。そして若干の金を与えた。すると一人の兵卒が海綿に酢をふくませ主に飲ませた。

主の最後は迫った。死との戦が始まった。冷汗は五体から滴り落ちた。ヨハネは十字架のかたわらに立ち、主の足を汗拭きでぬぐった。マグダレナはまったく悲しみに打ち砕かれ、十字架のうしろに寄りかかっていた。聖母はおん子とよき盗賊の間に、マリア・クレオファとサロメの腕に支えられて立っておられた。その時イエズスはおおせられた。「成り終わった。」

それから主は頭を起こされ、大きな声で叫ばれた。「父よ、わたしの魂をみ手にゆだねます。」それは天と地をつらぬく鋭い叫びであった。ついで頭を垂れた。ご靈魂は肉体を離れた。わたしは主の靈魂が輝く影のごとく十字架から地中に入り、古聖所に降りてゆかれるのを見た。ヨハネと聖婦人たちは地上に頭を打ち伏せた。

アベナダルは馬を十字架の丘に乗りつけ、茨の冠をかむらされたキリストの顔を、長い間深い感動と張りつめた気持ちの内に見つめていた。イエズスが死去されるや、大地はふるえ、主の十字架と左の盗賊との間の岩が大きく裂けた。この神のしるしは恐怖とおののきを呼び起こす深い戒めのごとく、悲しめる自然をつらぬいた。同じような思いを持っている者の心は、苦痛の刃をもつ

てさしつらぬかれた。その時恩恵がアベナダルに下った。かれの馬はうちふるえ、かれの感情も激しく動いた。かれのかたくなな傲慢な性格もカルワリオ山の岩のように砕けた。かれは槍を投げ捨て、そのたくましい拳をもって強く胸を打ちながら高らかに叫んだ。それは新しく生まれ変わった人間の声であった。「全能なる神は賛美せられんことを！この人は義人であった。確かにこの人は神の子である。」大勢の者はこの隊長の言葉に揺り動かされ、かれに倣った。

今や、新たに救われた人間としてのアベナダルは、公然と神の子に敬意を表してからは、もはや主の敵に使われることをいさぎよしとしなかった。騎馬のかれはロンギヌスと呼ばれた下士官カシウスの方に向けて駆け寄り、馬から下りた。そして、その槍をカシウスに手渡した。下士官が馬に乗った。そして指揮をとった。アベナダルは直ちに急ぎ去り、ヒノンの谷の洞穴に行つてそこに隠れていた弟子たちに主のご死去を知らせた。それからさらに城内のピラトの所へ走った。

イエズスがしの瞬間叫ばれ、大地が打ちふるい、十字架の丘が裂けた時、そこに居合わせた者は激しい恐怖におそわれた。その恐怖はあらゆる自然をゆすぶった。その時神殿の幕は裂けた。多くの死人が墓から出て来た。神殿の壁はくずれ落ちた。またもろもろの山や建物が崩壊した。

そこに居合わせた群衆から多数、また最後にのぼつて来たファリサイ人のうちの何人かが悔い改めた。大勢の者は胸をうち嘆き訴えつつ、あわてて山を下つて行つた。他の者はおのが衣服を裂き、灰を頭からかぶった。

イエズスが死去されたのは午後三時少し過ぎであった。地震の

最初の恐怖が去るや、数人のファリサイ人たちはふたたび大胆になった。かれらはカルワリオ山の裂け目に近づき石を投げ込んでみたり、また縄を継ぎ合わせて底へ下って行ったりした。しかしかれらは底まで行き着かぬうちに少し不安になって来た。また群衆の感情の変化を見てとったので馬を走らせて帰った。カシウスは五人ばかりの兵と共に十字架のかたわらに残っていた。イエズスの友は遺骸を取り囲み、あるいは十字架に向かって、深き悲しみと嘆きに打ち沈みつつ座っていた。あたりは物さびしい静けさを加えた。そこ、この高地に弟子が二、三人立ち現れた。かれらは恥ずかしそうに、また悲しげに十字架を見つめていたが、人々が近づいて来るや、ふたたび引き返して行った。